

テレマカシーとは？▶ Terima kasih = インドネシア語で感謝を表す言葉。在宅で看取らせていただいたある方は海外旅行が大好きでした。その方が最期にご家族に残された素敵な言葉を使わせていただきました。

## 〔 平和の祈り 〕

小児科セミナー参加のため秋の広島を訪れました。川べりに建つ原爆ドームは、戦争の悲惨さを伝える貴重な世界遺産です。平和公園で手を合わせ、何年かぶりに石碑に刻まれた言葉を読み返しました。

「安らかに眠って下さい  
過ちは  
繰り返させぬから」

ずっしりと胸に響く言葉です。私は、学生時代に同じ敗戦国であるドイツ(旧西ドイツ)のダハウ(Dachau)という町を訪ねたことがあります。ここにはナチス・ドイツが最初につくった強制収容所があり、ユダヤ人を弾圧した負の遺産が



そのままの形で公開されています。多くの見学者の中にドイツ人の小学生たちがいました。彼らは自国の加害者としての歴史を学びに来ていたのです。わが国はどうでしょうか。栃木でも足尾銅山に連れてこれた過酷な労働の末に亡くなった隣国の人々がいます。わが国がアジアの人々に何をしてきたのか。私たちは次の世代に平和を守ることの大切さをしっかりと伝える必要があると思うのです。

9月末に宇都宮できょうされん全国大会が開かれました。そこで落合恵子さんが「平和の反対は無関心である」という言葉を紹介されました。太平洋戦争が終り60年になりますが、世界では争いやテロが絶えません。立場の弱い人が辛い思いをする現実が内外にはたくさんあります。世の中で起こる理不尽なことには目をつぶらず関心を持ちつづけたいものです。

過ちを繰り返さぬために。

ひばりクリニック  
高橋 昭彦





# 病院と地域の ネットワークづくり

## 人工呼吸器をつけた子どもたちの地域生活

平成17年8月、人工呼吸器をつけた子の親の会(バクバクの会)の主催「病院と地域のネットワークづくりを考える会」が開かれました。

自治医大小児科臨床心理士の稲森絵美子さんからは、バクバクの会栃木支部で行ったアンケート結果(表1・表2)が発表されました。病院側と地域側と一緒にカンファレンスを行い退院前から準備する必要があること、退院すると家族は動けなくなるのでコーディネーターに連絡すれば必要な情報がネットワーク全体に伝わりと助かること、担当医やソ・シャルワーカーが交替すると病院と地域との連携力が低下することが経験されるため、適切に後任者に引き継いでほしいなどの要望が挙げられました。



### 在宅を始めてよかったこと

- 家族と一緒に暮らせる
- 子どもの体調が安定した
- 子どもに愛情を注げる
- 納得できるケアができる
- 病院への往復がなくなり時間に余裕がもてる

表1



### 在宅生活で困ること

- 地域で安心して預けられる短期入所などの場所がほしい
- 地域で定期的にも臨時にも訪問してくれるコーディネーターがほしい
- 訪問入浴をしてほしい
- 地域スタッフとの連携を密にしてほしい

表2

栃木市の田村文夫さんからは、平成17年4月に栃木市が開設した福祉トータルサポートセンターの紹介がありました。このセンターは障害の種類や縦割り制度にとらわれず、保健、福祉、教育など、その人に対する支援体制が一貫して提供できるように専任のスタッフが常駐する画期的なものです。病院のソーシャルワーカーからは、子どもの退院にあたってセンターに相談すれば地域と連携がとれるので大変助かるとコメントがありました。実際に栃木市で在宅生活を開始した子どものお母さんによると、センターからは毎月訪問してくれて意見も言いやすい、伝えた意見は関係機関にも連絡が行く、無理と思っていた訪問入浴も相談したら実現して助かっているなど、かなり評価は高いようです。

国際医療福祉大の下泉秀夫さんからは、なす療育園における短期入所について発表がありました。短期入所を定期的に使う人工呼吸器の子どもは3名で、中には1週間ほど利用する子どももいます。短期入所では看護側の受け入れ体制がポイントで、人工呼吸器は子どもによって使う機種が違い、アラームやトラブル

などもあるため扱いに慣れるにはそれなりの経験も必要なこと、それ以上に大切なことは吸引と管からの栄養注入が正しくできるかどうか。これはただやればよいというものではなく安全に確実にできるかどうかが重要で、何かあったときには当直医が対応するため全ての当直医の共通理解も必要です。最も大切なことは、こうした子どもを受け入れる姿勢があるかどうか、やる気の問題です。看護側にその姿勢がないととても対応できないが、最終的にはトップがどういう姿勢で臨むかどうかです。

のざわ養護学校つくしんぼの金子洋子さんからは、人工呼吸器をつけた子どもの就学前の訪問教育についての発表がありました。重度の子どもにも可能性があります。毎回体を順番に触っていくと、当初は緊張も強く反応も安定しなかったが、継続していくと本人の反応が適度で安定してきます。こうして関係性を保ってから、手でスイッチを持ってもらいスイッチを押すと...メリーゴランドが回る。これは外界とのコミュニケーションが取れる可能性につながります。



引き続き行われた全体討議では、地域でのコーディネーターは必須というのは共通の理解になっているようでした。しかし、誰がコーディネーターを行うかについては地域によってさまざま、保健師が対応するところ、広域で人数も限られている障害者コーディネーターが担当するなどいろいろです。成長・発達に伴い教育機関との連携を含めた継続的な調整が欠かせないことから、栃木市の取り組みは注目して行きたいところです。地域のサービスはまだ格差がありますが、訪問入浴を実施しているところではとても喜ばれています。教育については、子どものやりたいこと、できる可能性のあることを増やしていくという必要があります。今後ますます就学年齢の子どもが増えるので、訪問と通学を併用するなどの試みも選択肢の一つではという意見がありました。後方病院(何かの時に対応してもらおう専門病院)については、病院の主治医が交代すること、複数の診療科にまたがると個別に診療科を回る通院には大変な労力が必要なこと、いずれ解決しなければならず地域で困っていることを病院側にも適切に対応して欲しいことなどの意見がありました。



私はこの集まりの司会を担当しましたが、会場には100名を超える方々が詰め掛け熱心に意見交換ができて大変元気をいただきました。安心して預けられる短期入所が極端に少ないこと、学校への通学を期待する声があることなど課題は少なくありませんが、私たち一人一人が関わり、声を出していくことの大切さを感じました。

この集まりの後、ある自治体では、それまでは何かあると家族から連絡をしていたのに、最近はコーディネーターから「何かありませんか?」と毎月連絡が入るようになったり、小山市では10月から市の事業として訪問入浴が始まったりと、季節は秋ですが、バクバクっ子たちの周りには少しずつあたたかい風が吹いています。理解をしてくださる方が増えることを祈りつつ...

# 手話で心が通い合う

## 手で話し、目で聴く人との出会い

**そ**れは新鮮な体験だった。私のすぐ隣に手話通訳の方が立った。その手話を肌で感じながら、会場で「他者と関わる経験が力になる」という題で話をした。会場は手話のわかる人が大半で、その何割かは聴覚障害のある人だった。何か話をする時には手話通訳の方は舞台の脇に立つことが多かったが、今日は違う。手話通訳の方が中央の私の傍らに立つ。今日の主役は「手で話し、目で聴く」人たちののだ。

**私**は知っている2つの手話のことをまず話した。親指と人差し指でチョコをつくり顎の前から何かをつまむようにずっと手を下にひく。これは「好き」という意味になる。会場の皆さんに向かってこれをすると、会場がなごんだ。もう1つ、目の前に漢字の人という字を書き、右手で力こぶをつくり左手でこぶを表現する、これは人の力、意味は「人権」となる。最近、私は子どもの虐待についてのセミナーで森田ゆりさん(エンパワメントセンター)からこの手話を教わり、大変気に入った。虐待を受けた子どもは、誰にもいえないその現実を心を押し殺して耐えている。家で父親が母親にすさまじい暴力をふるっていても机に向かうと周りの音が消えるという。心を閉ざし無関心にならないと自分の心を守れないからだ。しかし、信頼のできる誰かにそのことを伝えることができれば、それは解決の始まりとなる。SOSを発信できる力、大人を信じる力、それは子どもの内的な力だ。自分はこんなことをされたくない、こうした思いを人に伝えること、そしてその思いを聴くことができる大人がいること、それはその子どもの人権を守ることになる。人権は誰にでもはじめから備わっているものだ。弱い立場にいる子どもが、誰かに自分の気持ちを伝えられると、子どもは社会から孤立しないでいられる。人の力と書いて「人権」。この大切なことを多くの人に伝えたいと思っていた。その最初の場が今回の集まりだった。私の想いは手話通訳の方々の手を通じて会場の皆さんに伝わったと思う。

**懇**親会になった。聴覚障害のある人のいるテーブルでは手話が主な言語になった。テーブルの皆が手話で応じる。そこには健常者もいたが、手話だけを使い皆それになづく。手話でこれだけのコミュニケーションが取れることに私は感動を覚えた。2次会では手話のできない健常者はほとんどいなくなった。すべての会話が手話で進行していく。私に手話で話し掛ける人がいると、近くの手話の堪能な健常者が通訳をしてくださる。そのことが大変嬉しかった。今、この場所では手話を使えない私は少数派になっている。ここでは手話を使える人が多数派なのだ。だが外の社会では手話を使える人はほんの一握り。彼らは一般社会では少数派になってしまう。手話を理解しない人が多いため、彼らは孤立し、職場や作業所でうまくいかないことが多い。私は手話を使う人が多い環境にいるという体験をし、周りの人とコミュニケーションがとれることがいかに大切かを改めて知った。私はたくさんの手話を教わった。「おいしい」「私の名前は高橋です」「きれい」「また来てください」などなど。

**そ**まんちつく村温泉館で開かれたこの大会に出るきっかけは、在宅医療の担当をしている35人の利用者の中に、ただひとり、ろう重複児である小学校の女の子がいたからである。彼女は呼吸障害もあるため人工呼吸器をつけ酸素を吸いながらろう学校に通学する。いろいろな障壁はあるが、県内で小学校に通学している唯一の人工呼吸器をつけた子どもだ。聴覚障害に加えて、身体障害、知的障害、精神障害など別の障害も併せ持つ人のことを「ろう重複障害児・者」という。少数派の中の少数派だ。彼女は聴覚に重い障害があり、コミュニケーションは手話で行うが、手話を覚えてからは飛躍的に彼女の世界は広がった。その彼女のお母さんは、日常的に手話を使い、私と話す時も手話を使いながら口でも話す。常にそうすることが手話を身に付ける早道だそうだ。私はこの集まりに出たことで、自分が少数派になるということを体験でき、手話が実は聴覚障害のない側にこそ必要だということを感じた。手話ができる医療スタッフがほとんどいないことも知った。そして、もっと手話を学びたいと思った。

(平成17年9月 全国ろう重複児・者家族連絡会 東日本ブロック会議)





## 窪木律子さん ありがとうございました!

**開** 設準備から、唯一の常勤スタッフとしてひばりクリニックを支えてきた事務の窪木(くぼき)さんがこの10月で退職します。子どもとお年寄りにあたたかい配慮ができる、字がきれい、言葉遣いが丁寧、電子カルテやパソコンができる...開業を決意してからいくつも条件を出して人探しをしていた私に、知人が「ひとりだけいる!」と紹介してくれたのが窪木さんでした。今や窪木さんの心遣いがそのまま待合室の雰囲気となり、スタッフの姿勢の基本となりました。後任は丑久保久子(うしくぼひさこ)が常勤となり仕事を引継ぎます。スタッフ一同、皆様に喜んでいただけるよう、さらに精進してまいります。窪木律子さんに感謝! そして お幸せに!



窪木律子さん(前列左端)とクリニックのスタッフ

### ひばりクリニックでの3年半

たくさんの方々を支えられてどうにかやってこられました。受付でマスクをしていると「なーんだ、風邪ひいちゃったんかい?」と心配して下さる方。ちょっと席を外していると「今日は休みかと思ったよ」とお声をかけて下さる方。まるで私の方が受診に来たようなあたたかさを感じます。しばらくお会いしていないお子さんを「ちゃん元気かな?」と心配する仲の良いスタッフ達。お客様にもスタッフにも常に同じ姿勢で接して下さるやさしい先生。ひばりクリニックを通じて出会った皆様との充実した、とても楽しい3年半でした。私の住む街にもこんな「ちょっと変なクリニック」があったらいいな!と願っています。長い間、本当にありがとうございました。 窪木 律子(旧姓 宮崎)



## わっどわ〜く

### 人工呼吸器をつけた子どもたち

人工呼吸器をつけた4歳の瓦井尊(たける)君とお母さんが、9月28日に栃木県議会を傍聴しました。これは栃木県議会議員の上野通子さんが、人工呼吸器をつけた子どもへの対応(短期入所など)について質問をすることになり、お母さんの希望で実現したものです。上野さんからは、人工呼吸器をつけた子どもが家で暮らすには家族の負担が大きいこと、預かってもらえるところがほとんどないため次の子を産むのをあきらめる人がいること、など現場の声を代弁する発言がありました。この様子は下野新聞でも取り上げられました。

### 森田ゆりさんの講演会があります

男女共同参画センター公開講座

「DV! 愛が暴力に変わるとき」

講師: 森田ゆりさん(エンパワメント・センター)

日時: 平成17年12月3日(土)13:30~15:30

会場: とちぎ女性センターパルティ(宇都宮市)

森田さんはアメリカで長く虐待やドメスティックバイオレンス(DV)分野の支援をされてきた現場のプロです。

申込は直接パルティまで TEL.028-665-7700  
12月2日 締め切り 定員250名

## 「ひばりクリニック」のご案内

### 診療時間

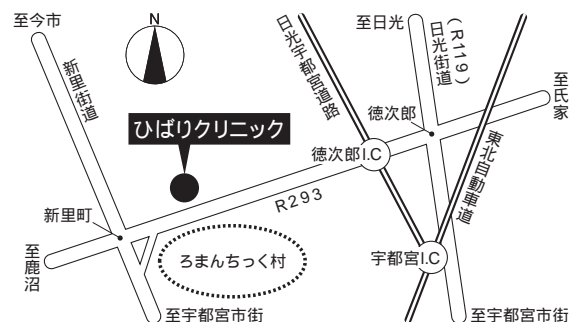
時間	日	月	火	水	木	金	土
9:00 ~ 12:00	(休)			(休)		訪問診療	
午後 (在宅医療)	(診)	訪問	訪問	(診)	訪問		訪問

### ひばりクリニックの運営理念

- 1) 在宅で過ごされるご利用者に出前の医療を提供すること
- 2) 子どもからお年寄りまで診る家庭医の機能を提供すること
- 3) 障害児・者やお年寄りの生活を支える市民活動を支援すること

この通信は、子どもから大人まで、障害のある人もない人もどんな人も社会から排除されることなく、地域で一緒に生きていける世の中を目指して、ひばりクリニックが企画・編集しております。この通信についてのご意見・ご感想はひばりクリニックまでお寄せください。

栃木県宇都宮市の西北部、新里町(にっさとまち)にある、ログハウス風の小さな診療所です。



〒321-2118 栃木県宇都宮市新里町丙357-14

TEL 028-665-8890 FAX 028-665-8899

E-mail [hibari-clinic-01@theia.ocn.ne.jp](mailto:hibari-clinic-01@theia.ocn.ne.jp)